

第2班

絵画・版画・写真に見られる19世紀ヨーロッパの都市生活

(1) 共同研究員名

研究代表者：熊谷謙介

共同研究員：小松原由理 鳥越輝昭 ステファン・ブッヘンベルゲル

研究協力者：田中里奈

(2) 研究目的

19世紀に作成された絵画・版画・写真の中で同時代のヨーロッパの代表的な数都市の生活ぶりがどのように描き出されているのかを分析していく。

多くのヨーロッパ都市は、この世紀の半ば頃から、それまで大なり小なり受け継がれてきた形状を捨てて、大きく変貌していった。同時代の視覚媒体は、それらの都市に暮らした人々の生活ぶりをどのように描き出していたのか。(1) 同一都市の変貌前と変貌後の対比、(2) 各都市間の対比、という二つの観点から画像資料の分析を進めていきたい。

第四期には主として、「広場」を取り上げたい。広場は、革命に象徴的なように民衆が集い、意思が表明される政治空間であると同時に、商業や祝祭の特権的な空間であり続けている。広場の意味を都市論・社会史の文脈から考察してきた研究は多いが、(1) ヨーロッパの各都市を横断し、(2) 都市改造も視野に入れて広場の変容を追ひ、(3) 単なる証言にとどまらない機能をもつ、写真という新しいメディアによる都市表象も組み入れる、という点で独創的な研究計画となるだろう。

(3) 活動経過（目的達成のための方法、各年度の研究・調査経過、成果の公開状況等）

2017年度

・2016年度となるが、熊谷謙介研究員が「写真のポスト・トゥルース性—非文字資料としてのパリ・コミュン表象」というタイトルで、非文字資料研究センター2016年度第4回公開研究会「歴史研究と非文字資料研究の対話(2)—日本と台湾を事例に」(神奈川大学)にて発表を行った(2017年3月4日)。19世紀ヨーロッパにおいて、写真や絵画(版画等)を歴史資料として扱うことの問題について取り上げ、本共同研究の問題設定を定めた。

・ヴィーンを中心とした都市表象を調査する研究員として、田中里奈氏(明治大学博士後期課程)を研究協力者とした(2017年11月-)。彼女は当時オーストリア政府奨学金を得てヴィーンに留学しており、現地取材や資料調査を担当した。

・2017年11月29日(水)に研究会を行い、下記のような方針で共同研究を進めていくことになった。

1. 対象とする年代としては、19 世紀前半では資料が見つかりにくい都市も想定されるため、時代を進めて 1900 年前後、世紀転換期（世紀末から第一次世界大戦前夜まで）を検討する。以下のよう理由である。

(1) 写真資料が集めやすい。

(2) 著作権の問題もクリアしやすい。

(3) ベル・エポックに対する回顧的視線だけでなく、下層階級にも目を向け、ストライキや移民の表象など、よりリアルな都市生活に迫ることができる。

(4) 一方で、スポーツや海水浴などのレジャー文化の到来をこの時代に見出すという視点をとることもできる。

(5) こうした研究をヨーロッパの諸都市で比較しながら論じるという視点は、先行研究に多く見られない。

2. 研究成果としては、図版（絵画よりも写真、版画、イラスト。現在の同じ地点の写真）＋解説という形式をとる。商業出版という形を模索する。

3. これからの方針としては、まずは各都市の 1900 年前後の都市景観（広場など）・都市民の肖像（職業・典型）・都市生活（イベントなど）について、資料調査を行っていく。

4. 『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』で扱った都市（ロンドン、パリ、ミュンヘン、ウィーン、ヴェネツィア、ローマ）以外の都市についても調査を行い、分析対象になるかを検討する。

・現地調査（出張）：

熊谷謙介研究員：パリ、リヨン等での都市表象（絵画・写真）調査（2018 年 3 月 4 日～18 日）

2018 年度

・19 世紀後半からベル・エポック期（第一次世界大戦前まで）のヨーロッパの都市表象を、絵画・版画・写真から考えるという枠組みから、本年度は先行研究の分析、資料の探索に力を注いだ。

・実際にはジャン・ベロー（1848－1935）というフランスの風俗画家の作品群を中心に分析を行った。また、版画という、この時代に視覚情報の伝播を可能にした複製技術メディアについても、その特性について分析を進めた。

・2018 年 12 月 19 日（水）に研究会を行い、オーストリア・ウィーンでの留学から帰国した田中里奈研究担当者（研究協力者・明治大学博士後期課程）により、「写真に見る 19 世紀ウィーンの都市生活」と題した研究発表が行われた。ウィーンの都市景観の特殊性、都市の人の表象の変化（一般市民からウィーンっ子へ）が論じられた。数多くの視覚資料が、現地で入手された書籍とともに紹介され、また各都市を専門とする研究員どうしで、ヨーロッパ都市表象の共通性が議論された。一方で、観覧車や馭者といったウィーン特有の都市（人物）表象については、ノスタルジーや「テーマパーク」という側面から分析された。

・2018 年 12 月 21 日から 12 月 31 日まで、ステファン・ブッヘンベルグ研究員によって、ドイツ・ミュンヘンでの現地調査・資料探索が行われた。この成果については年度中に発表会を行い、知見を共有する予定でいる。

・2019 年 2 月 16 日（土）に行われた非文字資料研究センター 10 周年記念シンポジウム「非文字資

料研究の過去・現在・未来」において、ヨーロッパ研究班の報告を熊谷謙介研究員が行い、絵引研究においても多様なメディアや、マイノリティ文化を取り上げることの可能性を提案した。また基調講演のコメンテーターとして、鳥越輝昭研究員が、ヨーロッパの視覚芸術を非文字資料として扱う中で生じる限界と可能性について論じた。

・現地調査（出張）：

ステファン・ブッヘンベルグ研究員：ミュンヘンでの都市表象（絵画・写真）調査（2018年12月21日～12月31日）

2019年度

・19世紀後半からベル・エポック期（第一次世界大戦前まで）のヨーロッパの都市表象を、絵画・版画・写真から考えるという枠組みから、本年度は実際の視覚資料の分析に力を注いだ。

・実際にはジャン・ベロー（1848－1935）というフランスの風俗画家の作品群を中心に分析を行った。2019年6月5日（水）に研究会を開き、熊谷謙介研究員が「遊歩者、貧民、ワーキングウーマン、民衆、スポーツ」という題の研究発表を行い、世紀転換期のマイノリティ表象や、勃興する大衆文化を映し出すイメージについて、討議した。またその成果は、熊谷謙介研究員「女性は都市の「遊歩者」となりえたのか？—ジャン・ベローにおける「使い走り」の表象をめぐって」として『非文字資料研究』第20号（2020年3月発行）に掲載された。

・2019年8月14日から9月3日まで、熊谷謙介研究員によって、フランスでの現地調査・資料探索が行われた。フランス南西部のバスク・ミュージアムを訪問し、ルルドやオロロン・サント・マリーにて、ピレネー（ベアルン地方）文化の展示を見ることができたが、フランス東部に位置し民衆版画で有名なエピナルにも訪問することができた。これについては、「民衆版画の中心地、エピナルのイメージ・ミュージアムを訪ねて」という報告文が、「非文字資料研究センター News Letter」第43号（2020年3月発行）に掲載された。そこでは版画という、19世紀に至るまで視覚情報の伝播を可能にした複製技術メディアについて、生活文化を探るための研究対象としてとらえる際の枠組みが素描されている。

・他の地域の都市表象・大衆表象や、版画や写真といったメディアを含んだ視覚資料の分析については、研究期間を終えた来年度以降も、さまざまな媒体において行っていく予定である。

・現地調査（出張）：

熊谷謙介研究員：パリ、エピナル等での都市表象（絵画・写真・版画）調査（2019年8月14日～9月3日）

（4）研究成果（成果物、獲得された知見、収集資料の解題等）

2018年度

・熊谷謙介「ペンで描かれた「象徴主義」—アルベール・オーリエの美術批評」『人文学研究所報』61号、2019.3、pp.1－15.

・田中里奈「文化政策遂行機関としてのヴィーン劇場協会—オーストリア・ヴィーンにおける文化管

為の政治性」『明治大学国際日本学研究論集』第8号、2018.9、pp. 19-38

・田中里奈「A Jukebox Musical, or an »Austro-Musical«? — Cultural Memory in Localized Pop Music(al) I am from Austria (2017) —」日本演劇学会分科会『西洋比較演劇研究』第18号、2019.4、pp. 1-20.

2019 年度

・熊谷謙介「女性は都市の「遊歩者」となりえたのか? — ジャン・ベローにおける「使い走り」の表象をめぐって」『非文字資料研究』第20号、2020.3、pp. 31-57.

・熊谷謙介「民衆版画の中心地、エピナルのイメージ・ミュージアムを訪ねて」『非文字資料研究センター News Letter』第43号、2020.3、pp. 30-31.

(5) 今後の課題と展望 (自己点検・評価)

・「絵画・版画・写真に見られる 19 世紀ヨーロッパの都市生活」というテーマ設定については、とりわけ絵画と写真を並行させて研究対象に組み入れたことにより、従来の都市表象分析に新たな視角を与えることができたように思う。

・前衛絵画運動が次々に勃興し、リアリズムの枠組みが揺り動かされたとされる 20 世紀転換期においても、都市風景画・都市風俗画の伝統が存続していたことも発見であった。

・また、絵画・版画・写真のみならず、広告・ポスターやファッション・プレート、民衆版画、リトグラフ、絵葉書、新聞・雑誌・書籍に掲載される挿絵、都市風俗本・観光ガイドなど、多様な媒体との関連を探り当てたことも重要だった。

・一方で、広場という場の表象分析は、大通りやそこを歩く都市民（とくに女性）などの表象分析へと移行したため、十分に展開することができなかった。研究対象となる時代を 19 世紀後半～20 世紀転換期に限定したが、とりわけこの期間に、都市の人々の交流の場が、商業や祝祭の特権的な空間であった広場だけでなく、都市の各所に拡散していったことも、その原因であるように思われる。

・都市表象分析の視点として、当初に想定していた社会史的アプローチに加えて、ジェンダー論的アプローチを導入することができた。従来、ジェンダー分析は美術史・視覚文化史研究に多く見られるようになったものの、非文字資料研究には十分に導入されてきたとは言えなかった。

・今回の研究を継承して行われる共同研究「〈メディア〉と〈身体〉から見る 20 世紀ヨーロッパのポピュラー・カルチャー」では、こうした多様な図像資料分析や、ジェンダー論的視点を取りつつ、身体技法の分析も試みることで、非文字資料研究のアクチュアル化に寄与することを目指している。